

Statement

首都圏反原発連合 —活動休止にあたり—

ご報告 首都圏反原発連合

福島第一原発事故から10年。首都圏反原発連合は、2021年3月末に活動を休止します。

ただし、原発ゼロ政策が実現するまで解散はしません。これは2019年秋に内定したことですが、最後の1年がコロナ災害に見舞われるとは予想だにしませんでした。コロナ禍でもオンオフしながら続いている金曜官邸前抗議も、開始から丸9年でいたん幕を下ろします。

PAST

首都圏反原発連合（反原連）は、2011年3月11日に起きた東日本大震災により引き起こされた未曾有の人災、福島第一原発事故が契機となり組織された。事故後、東京はじめ関東では様々な団体やグループが脱原発のデモをやり始め、毎週末、どこかでデモをやっているという具合だった。そうした状況下で知り合った、事故前から脱原発活動をしてきたMisao Redwolfと、事故後、ツイッターを通じてデモを呼びかけたTwitNoNukesの平野太一が、皆力を合わせようと、様々な団体に声をかけ、同年秋に反原連を組織した。



PHOTO : Masa Murata

反原連を立ち上げてすぐに呼びかけた渋谷デモを皮切りに、アクションを行うたびに参加者の動員が増えていき、2012年の3.11、原発事故から1年後に国会包囲を実現した。ちょうどその頃、大飯原発再稼働が進められており、それに対する抗議が、反原連の活動の軸となつた『再稼働反対！首相官邸前抗議』（金曜官邸前抗議）の起点となつた。同年6月に民主党政権が大飯原発再稼働の政治判断をしたことがトリガーとなり、官邸前には万単位の人々が集まるようになつた。そして、反原連メンバーが官邸で直接、当時の野田首相に面会するという流れに繋がり、当時、多く報道された。

この時期を契機に、反原連の活動は3.11後の市民運動をリードするものとして注目されたが、2012年末の政権交代で第二次安倍政権が発足したことにより、様々な問題が発生し市民運動のイシューが分岐してゆき、2015年頃

Walk and Talk it

批判の彼岸 —— 映画『皆殺しの流儀』

サシャ・ベネット監督の映画『皆殺しの流儀』（2014年）で、70歳を越えたリッチャーはギャンググループに殺された兄の復讐のため彼らを殺害していくのだが、主犯格のギャング・アーロンには自らではなく駆けつけた警察に射殺されることになる。「スッキリしない」と批判的な声もあったが、リッチャーが受話器を何度も置いたりファイルを開いたり、というシーンが挿入されており、アーロンを撃とうとした際に弾倉を何度も入れ直そうとできなかつた、という「強迫性障害の症状」を現実的に感じさせるための結末だった、と解することができる。

2011年5月、当時の菅直人首相が浜岡原発の運転停止

を要請した際、なぜ他の原発への要請もしないのか、と批判的な声もあった。が、菅の著書『東電福島原発事故 総理大臣として考えたこと』によると、経産省は「浜岡は止めるが他は安全なので稼働し続ける」という会見内容を菅に用意しており、菅はそれを無視し他の原発には触れない会見をし、当時の海江田大臣との関係が悪化することになったという。その後所謂「菅おろし」が党内に起きたことを考えると、菅が自らの意思を貫いたことが退陣に繋がつた、ということができ、菅の意思は現実的には原発維持を少しずつでも後退させていくものだった、と解することができる。（TH）

Energy Autonomy

にいたったのは一件のみだった。「反原連は警察に参加者の顔写真を提供している」「被ばくのことと言わない」「会計報告をしていない」「SEALDsの抗議で参加者を排除している」「反原連は共産党の下部組織だ」などなど、このようなデマのほとんどは左派から発せられたのだ。左右前後から撃たれながら、よくここまで続けてきたというのが本音のひとつであるのは間違いない。

2021年3月末に予定している、首都圏反原発連合の活動休止まであとわずかとなった。それに伴い、3年間発行してきたこの『NO NUKE PRESS』も休刊する。最後の号で何を書くべきか思案したし、こうして書いている今も思案が続いている。この9年半ものあいだには、4000文字弱の範囲では書ききれない多くの出来事があった。先に書いたことはネガティブなことのように見えるかもしれないが、日本の市民運動、市民社会が成熟に達しない理由として、共有する必要がある。しかしながら、文字数が足らない。良いことも悪いことも、改めて、反原連の記録集としてなんらかの形で残す予定だ。

FUTURE

今年の夏に「第6次エネルギー基本計画」が策定される。3.11以降の大まかな流れとして、事故当時の民主党政権は圧倒的世論に寄り添い脱原発に舵をきったが、安倍政権下で反対にされた。エネルギー基本計画において「原発は重要なベースロード電源」とし、福島原発事故から何も学ばず、原発推進に勤しんできた。安倍首相の寵愛を一身に受ける今井尚哉総理秘書官の意で、エネルギー政策を私物化してきたという経緯がある。コロナ災害下での難しい対応から逃げるよう安倍政権が瓦解し、菅政権に移行したが、いま現在、与党内部では原発推進派と脱原発派が拮抗している状況だ。

政権の一員であり、安倍政権下では脱原発について口を閉ざしていた河野太郎大臣が「総理になり脱原発を実現したい」と発信したり、河野氏とともに一般人気の高い小泉進次郎氏もそれに寄り添っている。いっぽうで、菅首相が2050年カーボンニュートラル宣言をしたばかりに、「CO₂を排出する火力ではなく原発が必要だ」と、3.11前にそだつたように推進派の常套句が再燃してきており、自民党内部の原発族議員などが声高くなつてきている。野党さえも、エネルギー問題と気候変動の部門を合体するような体たらく…。

CO₂を減らし、空気をきれいにするのは結構だが、原発問題を据え置きにして良いものではない。原発は運転中も微量の放射能をまく上に、事故が起こればどれだけの環境破壊をするかは、 Chernobyl や福島原発の事故を見れば明らかではないか。原発問題を最優先するべき「環境問題」ととらえることのできない人類は、反対の方向へ向かっているのではないかとさえ思える。自分の目で見て自分の頭で考え、いかに本質を見極めてゆくかが、コロナ後の社会での有機的かつ人道的な意識のパラダイムシフトには不可欠ではないのか。国会議員の皆さんにも「トレンド」や「受け」に流されることなく、本質的な視点で仕事をして頂きたい。

福島原発事故から丸10年、自公政権が原発を推進してゆく中でも、原発産業は先細ってはきている。しかし、くならない。原発ムラの解体は大きな社会的変革に繋がるくらいなので、とどめをさすには反対運動の押しだけでは難しく、社会意識の大きな変容が必要なのかもしれない。しかし、先細りながらも、温存したいムラ人たちのアンフェアな努力は続いてくのだろう。では、微力な我々は何をすればよいのか。それぞれの暮らしの中で、できる限り誠実に暮

らし、できる限り本質を見極め、他者を害したり陥れるような行為をしないということにつきるのではないだろうか。平和と安全な暮らしに繋がる全ての道は、そこが始まりなのではないだろうか。

2031年、今から10年後にはどうなっているのだろうか。反原連のことを忘れている人は大勢いるとしても、福島原発事故のことは忘れてはならない。今現在、放射能汚染で住めなくなった我が家に戻れない数万ものの人々は、どうなっているのだろうか。彼らは数万のうちの1という数字ではなく、それが唯一無二の人生の物語をもっているのだ。被災時に高齢だったかたの多くは、生々しい体験の記憶とともに亡くなり葬られるのだろうか。あるいは原発が廃止され、すっかり素敵な社会に生まれ変わり、今よりも不幸が少なくなっているのだろうか。

100年後に生きるまだ生まれ出でていない人々のために、安心安全で公正で不幸の少ない社会を作っていくことは、私たち大人の責任範囲だ。そのためには人類の行き過ぎた環境支配を改善し、これまで恩恵を受けてきた地球環境を尊重しながらともに進化していく道を探るべきだ。そのためにはまず、人類は、原発をはじめとした核物質を取り扱えるという愚かな奢りから脱却しなければならない。国際社会は原発問題を、一級の「環境問題」として最優先で取り組むべきなのではないのか。

NOW

最後に。これまで私たちの活動に賛同し、呼びかけに応え参加くださった皆さん、運営継続のためにドネーションのご協力をくださった皆さん、全国で連帯して金曜行動を実施されてきた皆さん、賛同し言論の場などでサポートくださった有識者や弁護士の皆さん、ともに歩んでくださった国会議員の皆さん、応援し手伝ってくださった皆さん、関わってくださった全ての皆さん、加えて、時に口論をしながらも官邸前・国会前の現場でお世話をした歴代の麹町署警備課長や警察官の皆さんに、心よりの感謝の意を表します。活動を通じ、心優しい皆さんと出会い関わることは、大きな財産になりました。心より、ありがとうございました。



ご報告はこちらでもご覧いただけます

<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=14644>



編集後記

3.11福島第一原発事故から丸10年になる今、自公政権により未だに原発が温存されていることは、権力者による大いなる不誠実に他ならない。国民世論は圧倒的に脱原発であるにも関わらず、古き悪しき慣習による悪政にとどめをさし、未来の人々に安全な環境を残したい。

わたしたち首都圏反原発連合はこの年度末に活動休止するが、それぞれの立ち位置で、今後も脱原発を訴えていく。このNO NUKE PRESSも休刊になる。これまで応援し読んでくださった皆様に、心よりのお礼を申し上げます。またどこかでお会いしましょう！

RECORD THE POWER OF THE PEOPLE!

2011年10月22日(土)

Rally for a Nuke-Free World in Japan

— 原発のない世界を求める大行進 —

主催:首都圏反原発連合 (Metropolitan Coalition Against Nukes)

呼びかけグループ: Act 311 Japan / 安心・安全な未来を子供たちにオーケストラ / 「怒りのドラムデモ」実行委員会 / TwitNoNukes / NO NUKE MORE HEARTS / 野菜にも一言いわせて!原発さよならデモ 協力:エネルギーシフトバレード / たんぽぽ会

2011年9月、首都圏反原発連合を組織するために、様々なグループから100人ほどの人々が参加しプレ会議を実施。その会議で、ひとまず合同でデモをやることが提案されました。この渋谷で開催したデモは、アメリカの『Rally for a Nuke-Free World』(主催: Coalition Against Nukes)に連携したもので、反原連の初めてのアクションとなり、当日は約300人が参加しました。

